

紹介

向南・張國慶・李宇峰編著

『遼代石刻文統編』

契丹人が建国し二百餘年続いた遼朝は、中国北方の開発、中華民族の経済・文化の発展、統一的多民族国家の形成に不朽の歴史の功績を遺した。しかし、遼史研究は立ち後れた状態にある。その原因は文献史料の乏しさにあり、元人が倉卒に編纂した『遼史』の訛誤缺略は数え切れない。このため、とりわけ考古資料は不可欠であり、その研究は喫緊の課題である。

向南編著『遼代石刻文編』（河北教育出版社、一九九五年）は、遼史研究者必携の資料性・学術性を兼備した力作だが、その出版後の十五年に大量の遼代漢文石刻が陸續と出現した。このたび、待望の『統編』が公刊された。各種の雑誌・報告書に散見し、甚だしくは未発表であった重要資料を集めた出土資料集であり、高水準の注釈をもつ研究書でもある。最新第一次資料の

検索に大きな便宜を供し、豊富で着実な注釈は参照価値が高い。中国国家古籍整理出版專項經費による三年間の資料収集・考証の成果であり、遼代漢文石刻一六三件を遼紀年に従って配列した本編に加え、「補編」は紀年はないが確実に遼代に属する二一件、「補編二」は『文編』未収録の七件、「外編」は遼史研究に裨益する新出金代石刻五件、全部で一九六件の石刻を収録する。「死蔵」状態に陥っている若干件を除き、絶対多数の石刻が網羅され、一九九五年以降出版された類書が比肩しえない質量を誇る。大量の石刻文拓片図版を準備していたが、出版社の都合でわずかに六幅しか掲載できず、また簡体字で排印されたため、石刻文本来の歴史的情報が失われた。これらは本書の瑕疵というべく、編著者・読者ともに遺憾とするところである。

遼朝の後族は皇族に匹敵する強大な勢力で、帝位の帰趨をも左右した。本書は内蒙古寧城地区や遼寧省阜新閑山などで出土した多数の後族墓誌を収録し、それらは国舅夷離畢帳と国舅大小翁帳の族属・世系・盛衰を記録して『遼史』外戚表の缺略訛誤を補正し、后族の生々しくかつ確実な第一次

資料を提供する。遼末の蕭奉先兄弟は、国舅小翁帳に出自するとされてきたが、出土墓誌によってかれらが国舅夷離畢帳に出自することが解明された。この結論は契丹文墓誌の解説によってもすでに獲得されている（愛新覺羅烏拉熙春『契丹文墓誌より見た遼史』、松香堂、二〇〇六年）。

本書が最も多く収録するのは遼代前期の名臣韓知古の家族成員墓誌である。韓知古は最初期に帰順した漢人で、かれとその子孫は長期にわたって契丹人と通婚した。一般の漢人官僚とは異なり、「契丹化」した漢人であり、契丹の皇族・后族と格別密切な関係を持ち、その地位と勢力は遼朝政治史に大きく影響した。

遼朝政権において、漢人官僚は多数を占め、契丹人の果たしえない役割をになっただけで、『遼史』の立伝は比較的少ない。耿崇美は比較的早く遼朝に帰順し、政権安定に貢献したが、『遼史』はかれに立伝せず、その家族成員の記述も少ない。『耿崇美墓誌』は耿崇美の系譜・官歴などを詳述し、『遼史』の缺を補っている。

宋人の著作『地理叢考』・『北蕃地理』などには穆州（陸州）はあるが成州はなく、

逆に『契丹国志』州県載記・『遼史』地理志には成州はあるが陸州はない。そのため、成州は陸州の改名とされてきたが、『蕭琳墓誌』は陸州が蕭思温家族分地に属する頭下州であったことを明記し、成州とは異なることを証明した。

本書収録の石刻文には『遼史』百官志に無い官職が頻見し、遼代官制史研究に確実な材料を提供する。また、本書収録の石刻文は『遼史』の多くの錯誤を訂正する。たとえば『遼史』皇子表は姜氏が聖宗の第六子侯古を生んだとするが、『聖宗淑儀贈寂善大師墓誌』に拠れば、宗願（侯古）を生んだのは淑儀耿氏（耿崇美の孫）であって姜氏ではない。また、『遼史』公主表は、聖宗の長女を燕哥とするが、『蕭受墓誌』は聖宗の長女を蕭受的母親とし燕哥とはしない。契丹文墓誌から彼女が聖宗の庶長女で、公主表では第六に並べられた細匿であることがわかる（『愛新覺羅烏拉熙春・愛新覺羅烏拉熙春女真契丹学研究』、松香堂、二〇〇九年）。本書は石刻文に新式標点を採用し、人物・事件・官制・地名などに漏れなく注釈を施し、『遼史』の缺略錯誤を逐一指摘する。本書は貴重な出土資料を保

存するだけでなく、『遼史』に対する補缺正誤をも達成している。

遼史研究の不断の深化にともない、遼代石刻文はその価値をいよいよ高めるであろう。三編・四編が引き続き世に問われることを切望するものである。

（一六開 三七六頁 二〇一〇年一月

遼寧人民出版社 四八元）

（吉本智恵子 立命館アジア太平洋大学教授）

クリストファー・ケリー著

（藤井崇訳・南川高志解説）

『ローマ帝国』

本書は Christopher Kelly, *The Roman Empire: A Very Short Introduction* (Oxford, 2006) の全訳であり、岩波書店から翻訳・刊行されている「1冊でわかる」シリーズの一書である。著者はいわゆる「古代末期」を専門として、これまで後期ローマ帝国の官僚制やフン族の王アッティラを扱った書物を公にしてきた。本書では、紀元前一世紀から紀元二世紀までのローマ帝国の

歴史が語られる。

かつて著者はある席上、ローマ史を研究する理由は「現代のアメリカに似ているからだ」と答えたことがある。その著者にとって、いまローマ帝国の通史を書くということはいかなる意味を持つのか。まずは、本書の内容を紹介していこう。

第一章「征服」ではローマが都市国家から帝国へと拡大していく過程が論じられる。共和政から帝政への移行は、権力闘争を規制する方法の変化に過ぎない、あるいは残酷な軍事行動の背景には、それを正当化する「帝国の使命」と呼ぶべきものが存在したといった指摘がなされる。

第二章「皇帝の権力」では、皇帝権力を浸透させるための皇帝のイメージと歴史書に描かれる皇帝のイメージに焦点が当てられる。前者のイメージは各都市で行われた皇帝礼拝の中に神の姿として現れる。一方、スエトニウスやタキトゥスの歴史書の中では、批判的な筆致の中からあるべき皇帝の姿が浮かび上がる。双方のイメージを合わせて、多角的に皇帝イメージをとらえるべきだとされる。

第三章「共犯」では、属州統治の実態が